

フランケンシュタイン・バイブル

◎川村 毅 1996年作

初演..

1996年4月 ザ・スズナリ

江戸糸あやつり人形 結城座 公演

演出..川村 毅

唐突に現れるテレビ・モニター。
多重人格者の朗読椅子。

●印はスライドへの映写。同時に英語のナレーション。

男がひとりテレビ・モニターでジエームズ・ホエール監督作品『フランケンシュタイン』を見ている。

女の声で小説『フランケンシュタイン』を朗読する声が聞こえている。

モニターには怪物が犯した最初の殺人についてのシークエンスが流れている。

●不在

●不在について

●鑑賞に当たっての基礎知識。

●原作者メアリ・シェリーは不在について過敏であった。

●フランケンシュタインとは怪物の名ではなく、怪物の創造主の名である。

●メアリ・シェリーは1816年に小説を発想し、1818年発表した。これを江戸の時間にあてはめると文化13年から文政元年に当たる。

メアリ・シェリーは文化文政を生きた女であった。

●イギリスの演劇史により1823年、文政6年以後の『フランケンシュタイン』の上演台本の存在が確認されている。

●2年後の文政8年、鶴屋南北が『東海道四谷怪談』を起こした年、江戸の見世物小屋で初めて『フランケンシュタイン』の物語が公開された。

●さあ、今日はぼくたちのアイドル、フランケンシュタインとその怪物について考えよう！

文政8年、江戸の見世物小屋。

裸体の両性具有者は刀を切っ先から口に入れ、少女は口から火を吹く。

ろくろ首は栈敷にまで伸びて笑い、200キロ以上はあると思われる女がゆで卵を食べながら、地を這って移動する芋虫男を嘲っている。デブ女は真っ白い脂肪の塊りで傍らに卵が山盛りになったカゴを置いている。芋虫男は色の黒い坊主頭だ。

おっぱ頭のピンヘッドが走り回っている。

顔面に体毛の生えた髭女。

やがて奥の暗がりから現れる侏儒の男。座頭！」の掛け声。この男は胎児の遺体を抱えている。

座頭 人間！文政8年3月11日、すなわち今日、彼は人間として生まれた。神秘なる生命！これより父母の手によってこの不可思議の更地に慈悲の心と傲慢の魂が教育されようとしております。なんと不憫な運命のもとにあるのか、人間という物体は！人間とは生まれてから死を迎えるまで休

むことなく教育を施され続けなければならない存在であるのか！わたしたちはできるならば、なにも教育のされないこの更地であり続けたかった。それともわたしたち人間とは、胎児の時すでに愛と憎悪を獲得しているものなのでしょうか。できれば胎児に戻ってそのことを確かめたい。しかしそれが不可能である今、だから彼に尋ねるのだ、君は更地か、はたまたすでに雨風、太陽、大吹雪を経験した荒野であるのか！

座頭が胎児の顔を棧敷のほうに見せると、その子が一つ目であることがわかる。

座頭　その彼は生まれ出たその時よりすでに人より三倍はある目を見開き、人間を観察し人生を見通し、絶望の果てに息絶えてしまった。わかりますでしょうか、諸君！人間の腹から生まれる者たちにはすべからく父と母とそして遠い祖先たちの愛と憎悪の記憶が埋め込まれていることを。更地である人間の誕生は母親の胎内からは決して望めないのです。そこでわたしども河原物一座は編み出したのであります、遠路南蛮より天賦の才を持つふらんけんすうたいん先生を招き、人間の腹から生まれない人間の誕生を！さあご披露いたしましょう、今宵一座の河原ショー、『からくり人間の恐怖・ふらんけんすうたいん先生、大江戸あっぱれの巻』！

ケケケケケケと現れるせむしの男。

座頭　あなたはだあれ。

せむし男　わ、わ、わ、われこそは、ふ、ふ、ふ、ふらんけんすうたいん。

座頭　この大根がっ！

高貴の血筋にありながら　生まれ落ちたるその日から

だれの因果かなんの定めか　背負った荷物

母上あちきの背中にはなにがはいってると聞けば

母は答えず泣いて抱き締め

表に出れば餓鬼ども集まり

やあい　なんでお公家のおめえが人足やってんだ

やあい　こんなかなにはいってんだ一度でいいから見せてみる

石を投げ　足蹴にし　ただ踏みつけられても背の瘤はもとのまま

瘤　瘤　につくきはこの背の瘤

父上なんであちきだけがこんな目にと問えば

父はひとこと　おまえの業がこうなった

なにをかくそうおまえこそ生まれながらに業をもった不吉な息子

わが子とも思えぬ醜き姿格好

あまりの言葉に 父上それはあんまりではと食い下がれば
父は振り払い おまえはわしの子ではないと言い放つ

倒れたるふらんけんすうたいん やつとの思いで我に返り さて真相はと母のいる間に走りだせば
一時遅かった 母は喉に刃をあててすでに果てたる 血潮のなかのその姿
嘆きたるふらんけんすうたいん 母の骸を抱き上げて 屋敷より駆け出し森のなかへ
ふらんけんすうたいん ふらんけんすうたいん ふらんけんすうたいん

火吹き少女 そのまま数十日。

芋虫男 昼間の木漏れ日、夜は月明かりのもとで。

デブ女 ふらんけんすうたいんは見た。

髭女 ゆっくり腐乱していくわが母を。

せむし男の背後に巨大な怪物の顔面が出てせむしを見守る。

顔面 死のあとにも筋書きがあった。腐乱という筋書き。そのもとで彼は人の造りを意識した。母
はこのことを教えるために死んだのだと合点した。彼は腐乱を止めたいと熱望した。それが人間の
体という筋書きへの反逆であることだとはまだ知らなかった。

●成長期における肉親の死はその人間への教育的作用の切断を引き起こす。

●不在の意識が彼を一気に高みにまで上げる。

●その場所は一切教育の関知するものではない。ウィリアム・ゴドウィン

ろくろ首 十年後、ふらんけんすうたいん、成長して医師となる。

医者 格好のせむし男。

座頭 ささつ、旦那こっちはです。なあに心配御無用、氣に入るブツは必ず手に入りやすから。裏街
道、裏街道。表は生きてる人の世界。それでもってこっちは死人と同居の世界。

死体の山。

座頭 どうです、ここは死体長屋！そいつは心中、それは辻斬りにやられたやつ。切り傷のあるの
は使えないかい。ああ、それは病死だな。病気のブツも駄目だろ、ねえ旦那。
顔面 黙っててくれないか。

座頭 なんでえ、人が親切にしてやっってるってのに。

せむし男はやおら鉋を取り出し死体の体を切断する。

顔面 右腕。

呼ばれた体たちが宙を舞う。

座頭 ひええええええっ！

顔面 左足。右足。左腕。胴体。性器。首。脳みそ。

ばらばらの人間が舞い踊る

ばらばらのまま舞い踊る

腕に足に胴体 頭

どれもこれも違う記憶をもった一部分

だからばらばら 踊りもばらばら

これを同じ踊りに稽古をつけるのは

せむしのお師匠 ふらんけんすうたいん

極細の電線に覆われた巨大な繭のようなものが現れる。繭のなかには人体が横たわっている様子。

顔面 絶対の孤独よ、われに生命を与えん！

電線に電流が通された様子。青白く輝く繭。

一座の面々が見守っている。

座頭 レディス・アンド・ジェントルメン、この瞬間にご注目ください。今宵この刻、江戸は河岸、ここ河原者一座におきまして、日のもとの国初めてのからくり人間が生まれ落ちるのです！

繭を破って現れる怪物。ふんどしを締めた裸体の大男。生々しい人体の縫い合わせの跡。顔にはひよっとこの面をしている。その面のせいか栈敷から笑い声が起こる。

座頭 なにを笑うか。畏怖せよ、からくりの細胞を。

怪物、面を取る。黄色い光を発する大きなふたつの目。ざんばら髪。そげ落ちた鼻の頭。裂けて血の滲んだ厚い唇。こけた頬には蛆が湧いている。

棧敷から驚愕のどよめきと恐怖に怯えた悲鳴、子供の泣き叫ぶ声。

座頭 ご覧ください、なんの因果かこの姿、手を触れないで、触れちゃあいけないよ凶暴ですからね。触れなくともこの怪物、必ずや皆様の今宵の悪夢に姿を見せるであります。その責任は当方取れ兼ねますのであらかじめご容赦のほどを。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏…

一同 南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏…

幕が引かれた様子。一座の人々、南無阿弥陀仏の姿勢を崩す。

怪物 終わったのかい。

座頭 ああ、今宵の幕は下りたよ。

怪物、顔に手をやる。皮膚を剥くような仕草をするとまた別の顔が現れ、すなわちもうひとつの面を取ったのであった。その下のこれが本当と思われる顔は、目の不気味な輝きはそのままだが、普通とはいえないまでも正視に耐えかねるといった造りではない。

座頭 おまえ、まだ慣れねえのか、汗びっしりじゃねえか。おい、おみねからくりの汗拭ってやんな。

その声に答えたのは劇中でふらんけんすうたいんの母親を演じていた女。劇中においてもそうだったのだが、この女は笠を被っていて顔の上半分を隠している。

怪物 かまうことはないです。自分でやりますから。気味悪いでしょう。

おみね 慣れたわ。最初は怖かったけど。この縫い目が裂けてきやしないかって。

怪物 ありがとうございます。ありがとうございます。

おみね、去る。ふたりの様子を座頭はじっと見ていた。

座頭 聞いたかい。おみねのやつ、おまえさんに慣れたってよ。からくりよ、いつ言おういつ言おうと思っていたんだが、おまえさん、おみねのことどう思ってたんだ。正直に聞かせておくんな。

怪物 …

座頭 なんにも言わねえか。まあいいってことよ予想した通りだ。言わねえってことは悪い気はしないってことだ。

怪物 そんな、お頭、頭の大事な娘に、そんな滅相もない。

座頭 慌てることはねえじゃねえか。

怪物 お頭の娘さんを思うなんざそんな大それたこと。

座頭 身分違いだっっていいたいのか。馬鹿言うんじゃねえよ。向こう岸の世間じゃあるめいし、おれたち下の下が身分がやいの生まれがやいのたまつてどうすんだ。

怪物 お頭、でもおれは人間でもない。

座頭 おれが人間にした。いいか、からくりよ、おれがおまえを引き取ったわけは最初からそう考えてのことなんだ。なぜってここには五体満足の男がひとりとしていねえんだ。おみねをもらっておくんな。

怪物 …

座頭 いい返事を待ってるからな。

座頭、去る。

火吹き少女が駆け寄り、怪物に野の花を手渡す。少女は言葉が不自由である様子。

怪物 ありがとうございます。

●さかのぼること1年前、怪物をひきとった侏儒はこの間演劇教育を施すことによって怪物の人間化に成功していた。

●舞台の上で怪物は怪物の面をつけて人々を恐怖の底へ突き落としていた。演劇と観客にとってそれは必要なことであった。

●『東海道四谷怪談』が江戸中村座で当たり狂言となった夏、一座の『からくり人間の恐怖』もまた川向こうの評判作であった。

●祝言の日・暑い八月の午後

宴会。祝言衣裳のおみねと怪物を真ん中に挟んで一座の者たちが祝杯を酌み交わし、雑然とした宴を形作っている。おみねは綿帽子を被っていて顔はあまり見えない。少女はやたらに火を吹いている。

会話及び独り言の話題内容に関する規制は一切ない。上演時におけるトピック、ゴシップの類いはいっこうに構うことはない。

それとはまた別に…

麻原影晃被告（40）が自ら主張した『ハルマゲドン・最終戦争』実現のため、教団所属の兵士を育成する目的で東京・大阪のホームレス数十名を集め和歌山・岐阜の山中で軍事訓練をしていたことが明らかになった。警視庁の調べではホームレス数十名を『映画のエキストラ』と称して集め、和歌山・岐阜県内の山中でモデルガンを使った軍事訓練を無理やり受けさせて専属兵士に仕立てあげようとしていたという（東京スポーツ）

現代の子供たちが抱える問題を解くキーワードとして『アダルト・チルドレン』が浮上している。アルコール依存症の親を持つ子供たちや、その家庭で育った大人を指す。親の飲酒問題が、子供の心をいかに深くむしばみ、大人になってからも大きく影響を及ぼすか。普通、家族はけんかと和解を呼吸のように繰り返して連帯感が生まれていく。だがアダルト・チルドレンの家庭では、依存症の親が暴力をふるっても記憶がないので、決して和解は生まれず怒りだけが沈殿していく。その怒りが社会に向くと非行へ。自分に向くと、手首を切って自殺を図ったり酒やシンナー、ドラッグといった自己破壊的行動へとつながる。また、リラックスできない優等生になり、成人後の過労死につながったり、権力志向を持ちやすいといった問題も指摘されている。アダルト・チルドレンは自分の家が恥ずかしいという感覚を持ちやすく、家に友達を呼べず孤立し、健全な人間関係を結べなくなりやすい。見捨てられ感と罪悪感が強いのも特徴で、ささいなことで友人や恋人に裏切られたと感じたり、親しくなると自分から逃げてしまう。相手の世話を焼き過ぎて関係を壊す女性もアダルト・チルドレンに多い。アルコール依存症の治療やその家族の回復に欠かせない考え方に『共存症』がある。患者のいる家庭をよく観察すると、世話焼きタイプの妻が夫のアルコール依存症を促進させる面が潜んでいる。妻が夫のトラブルの後始末をしたり、しらふになった夫を罵倒し、ストレスを高めるのはその典型だ。日本の家族は心理的に父親不在で母親密着型。アルコール依存症家族はまさにその典型で、現代の家族が抱えるいろんな問題を集中的に持っている。 東京新聞」

戦後ドイツではハイデガー批判が盛んで、特にハーバーマスは、ナチス関係の多くの資料を収集し、ハイデガーがナチスの党员であったことを明らかにし、ハイデガー思想とナチスとの関係を詳しく論じた。しかしたとえばニーチェに関するハイデガーの講義を読むと、ハイデガーが既に戦争中にナチスに対する幻滅を感じていたのも間違いないと思う。ナチスの立場はやはり意志の立場であり、ナチス批判がニーチェ批判になり、ひいては彼自身の初期の哲学の反省にもなっていたにちがいないと思う。 梅原猛」

初夜の床が敷かれている。おみねは蚊帳のなかの床の上に佇む。そこに近づこうとして逡巡の態の怪物。夏の宵の風物詩。風鈴。蚊取り線香。遠くの花火の音。蛙の鳴き声。

おみね そうだった、今日は花火の上がる夜だった。よかったねえ、あたしたちふたりを祝ってくれてるみたいじゃあないか。

怪物 すみませんでした。

おみね なぜ謝るの。

怪物 ここにいるのが私ですから。

おみね よくわからないよ。

怪物 本当は私なんぞがここにいていいわけはないんです。

おみね なんて。

怪物 私はからくりですから。自分の体がどうなってるのか自分ですらわからないっていう情けない輩です。

おみね そんなこというんだったらあたしだって自分の体なんか知らないさ。裂いて見たわけじゃあるまいし。

怪物 私はからくりです。

おみね あたしは河原者さ。

怪物 そうはいつでも、それが一体なんだっていうんです。河原者どうし、人間どうしで…

おみね その上疵物。いいかい、余計な期待はおよしよ。最初からいっておきます、あたしは疵物。…なに黙っているの。

怪物 どう対応していいかわからないんです。それがなにを意味するのか。ただ感情は停止したままで、どう動くべきなのか、学習がまだ足りないんだ、ああ情けない。

おみね あたしなんか、やめたほうがいいっていったよ。

怪物 はっきりいってください、私のことが嫌なんでしょう。

おみね 違うったら。あんた、あたしを本当に抱ける。

怪物 そのイロハはさんざっぱら学習しました。

おみね こんなふうなあたしでも。

おみね、綿帽子を取った。ここで初めておみねの顔全体が露わになる。額の真ん中に三つめの眼球。花火の音が近くなる。

おみね おとっつあんはね、だからあたしにはおまえさんがいっとうふさわしいと考えたのさ。どう、あたしを抱ける。

怪物 わからない、わからない、わからない。

おみね それみたことか。てめえは怪物のくせしやがって、人間の女馬鹿にしやがるってのかい。

怪物 ああ、わからない！

おみね 片輪は片輪でもこちとられつきとして人間、おっかさんの腹から生まれてるんだい。

怪物 違います。どう感情を動かしたらいいのか、それがわからないんです。今何が起きているのか、それにどう反応するのが正解なのかわからないんです。

おみね ばっかだねえ、正解なんざないんだよ。おまえさん自身がどう感じているかさ。

怪物 なにも感じていないとしたら異常でしょうか。

おみね 異常だよ。このあたしを見てどうとも思わないのは異常だよ。

怪物 なぜです。

おみね なぜって…うんとうんと…これがなんともないもんだとしたら、あたしらの芝居もなんともないってことじゃないか、そうになったらこちとらオマンマの食い上げだあ。

怪物 私はなんともない。

おみね だから人間じゃねえってんだ。なんでもないんなら、さっさとあたしを抱いてみやがれ。

怪物、おみねに近づく。

おみね 気味悪いんだ、このおでこの目。ふたつの目とは全然違って動くんだ。そいでもって男に抱かれている時は黒目がぐるぐる回りやがんのさ。

怪物 私は平気です。

怪物が蚊帳に入ろうとする。怪物を見たおみねの第三の目は怪しく輝く。その光に怪物は目を射貫かれたかのように遮り、後ずさる。その後近づこうとするが、その光のせいで動けない。

おみね やっぱりそうなんだ。化けもんでさえもあたしにはそうなんだ：

蟬の音。小説『フランケンシュタイン』の朗読。

●決まった日の決まった時刻、女は外に出た。怪物はそのことに気づいていたが、恐れのために追求することはなかった。

盥で行水を浴びているおみね。やや離れて怪物が立っている。デブ女が卵をもぐもぐ食べている。

おみね つたってんなら背中でも流してよ。

怪物 お出掛けですか。

おみね ええ。ちよっとお得意先。

怪物、近づき、湯を掛け、肌に触れる。おみね、その怪物を振り返る。第三の目が輝いている。怪物は唸り声を喉に溜めながら後ずさる。

おみねはその様子を見ると盥から上がり去る。

デブ女が大笑いする。

怪物がおみねを追おうとすると火吹き少女が怪物の立ちはだかった。少女は着物を脱ぎ捨て、怪物は恥じらうように顔を伏せる。少女は盥に入る。怪物は振り返り、少女をしっかりと見る。デブ女が笑う。

●共同体において私有財産はあり得ない。財産は例外なく平等に分割され、共有の概念が生まれる。

怪物は少女に触れる。少女、怪物を見る。条件反射的に怪物、一瞬目を覆うが大丈夫とわかる。デブ女、笑っている。少女は怪物にしゃがめと仕草し、接吻する。驚いたように怪物、立ち上がる。少女、怪物の股間をさぐる。

怪物、そうされながら少女の頭を掴み、ゆっくり湯船に落としていく。少女、微かに暴れる。

デブ女　ちょっとあんたなにやってんだよ、なにやってんだよおっ！

少女はうつ伏せで水面に浮く。怪物、デブ女のほうを向く。

デブ女　大丈夫。誰にも言わないから。あたしやこれでも口は固いんだから。

●怪物の最初の殺人

●晩夏の夕暮れ、怪物に最初の殺人の光景と感触が甦る。怪物にはそのことが今になっても不明だ。ただ確かなのは少女の不在という事実。

●不在

●不在について

蛸が鳴いている。火事のような夕刻。怪物は釣竿を垂れている。

●一座の誰もが怪物の殺人を知っている。

座頭が横切ろうとする。

怪物　お頭。

座頭　な、なんでえ、いきなりびっくりさせやがる。

怪物　おれのおっかさんはどこにいるんだ。　以前と違ってぞっとさせるような陰鬱な声のトーン

座頭　いねえよ、そんなもん。

怪物　どこの誰なんだ。

座頭　はなっからいねえよ、そんなもん。

怪物　嘘ついてんじゃないだろうな。

座頭　うるせいな、そんなに言うならこさえてやるよ。乞食だよ、そこらの乞食。

怪物　会ったことあんのかい。

座頭　ねえけどよ、臭い女だったって噂だよ。

怪物　おとっつあんは。

座頭　よお、からくりの。おめえ、おれに恥かかせるつもりかね。おとっつあんはおれだろが。

怪物 そうかね。そんなもんかね。

座頭 ちえっ、おまえのおとつあんはな、お公家さんよ。てめえがやってる芝居のなかでもそう
なってるだろが。おまえさんは、お公家さんが暇に任せてこさえた泥人形よ。そのままにしときや
いいものを、そのお公家さんは新しもん好きでな、泥人形にからくり仕込んじまって処置に困っち
まってたのをおれが引き取ったんだ。やいつ、いらいらしやがんな、地面に釣糸垂らしてなに釣ろ
うってんだ、この唐変木！

怪物 釣れるの知らねえな。

座頭 釣れるもんか。地面から釣れりやあ、千葉の漁師は苦勞しねえやつ。

座頭、去る。

怪物 知らねえだけさ。ほうら、釣れるじゃねえか。

釣竿を上げると糸には人骨がかかっている。

怪物 ほうら、あの子だ、あの子が釣れたぞお。

背後でせむし男が手を叩いてはしゃいでいる。

怪物 そうだ、おめえだ。おめえに聞けばよかったんだ。なんたっておめえがおれのおとつあん
演ってんだ。おい、せむし、おめえ、おれのおとつあんのこと知ってんだろ。

せむしは大仰なまでに知らない仕草をする。

怪物 嘘つくとしようちしねえぞ。知らねえんならどうやって、おめえ役作りしたんだよ。おめえ
の芝居は迫真的だよ。せむし、おめえは名優だ。

愚かなまでに喜ぶせむし。

怪物 おれは役者としてはまだまだだ。大体役作りってことを知らない。どうだ、せむし、いやも
う今日からは師匠と呼ばせてもらうぞ、せむし。役者はどうやって役を作り上げていくもんなんだ。
やっぱり模範ってのがいるんだろう。やっぱりな、それならまずその模範ってお人に会わせてくれ
ないか。そこからおまえさんの演技の手筈を学びたい。なに、ついて来いだと。

せむし、その仕草。怪物、後を追いながら、

怪物　こんなに簡単に行くとは思わなかったぜ。役者つてのはホントおだてりや木にまで登りやがる。

●森の中を抜け、せむしと怪物はやがて谷間の村落にたどり着いた。

●村は牛馬の皮剥ぎを生業にしている。奥まった一番山沿いの小屋にふたりは入っていく。

暗い小屋。天井の梁から吊るされた人体が三体。その三体は人体が腐乱していく過程を示している。怪物はそれらをじっと見つめる。

奥でせむしの叫ぶ声。せむしが泣きながら出て来る。それを叱りつけながら追って来るひとりの男。うらぶれた風情の、作りは美形ながら陰惨ななにかを表情に宿したその男。

男　勝手なことしやがって、この片輪がっ！

せむし、ひいひい泣きながら怪物の背後に逃げる。男、怪物をじっと見る。目を逸らせる。

男　いずれ来るだろうとは思っていた：できたばかりの頃に比べると顔付きが雲泥の差だ。成長したんだ。教育されたんだ。それで疑問を抱いたんだな。根源の問い。自分はどこから来てどこへ行くのか。来たばかりで落胆させるようで悪いが、ここにその答えはない。私自身それを知りたくておまえを造った。でも無駄だったようだ。おまえが教育を受け、人間になっていったからだ。おまえもまた凡庸な疑問を抱く人間に成り下がっただけだった。私は人間が嫌いなんだ。

怪物　なぜ造ったんです。

男　知らないな。性交の最中になぜをつぶやく人間がいるものかね。

怪物　そんなことを言うんだったら、おれはどうなるんだ。

男　がっかりだろ。だからおまえはここには来るべきじゃない存在なんだ。それをこの片輪の馬鹿が。

せむし男　ひいひいっ！

怪物、男の胸倉を掴み、

怪物　誰だ、あんたは。

男　ハハッ、それもまた根源的な問いだな。おまえはまったくいやになるほど人間なんだな。

怪物　誰なんだ。

男　なんでそんなになっちまったんだ。以前のおまえのほうが百倍好きだったぜ。ただの余計者のおまえが。ところがどうだ、おまえは今や問い続ける凡庸な人間、しかも一座の人気者、稼ぎ頭だ。どこでどう間違えたんだ。

怪物 余計者。

男 そうだよ、私は余計者を造ろうとしたんだ。

怪物、手を放す。

男 余計者の歴史。私の深夜の夢想。この村落を取り巻く自然。夜空。木々の匂い。空気の動き。死んだ牛馬の血の匂い。肉と皮を裂く音。腐っていく肉の色合いと匂い。男たち女たちの汗、糞尿、唾、精液、生理の血。呻き声、唸り声。川の流れの音。水面を蹴る魚。野鳥の羽ばたき。これら全部が私をその歴史に向かわせたのかも知れない。わかるか、私が生んだ化け物。人間にはうんざりだ。この反復に私は我慢できない。だから私には私の深夜には余計者の歴史が必要だったんだ。これこそ輝ける未来というものだよ、諸君！怪物 狂ってる…

男 その通り。おまえは物分かりが良過ぎてつまらんな。狂ってる私。狂ってるおまえの体。おまえの体の一部分一部分すべてが余計者の断片だ。死体置き場からこいつが盗み出して来た連中ときたら、全員が全員、見事なまでの余計者たちばかりだったよ、なあ、せむし。

せむし、喜んではしゃぐ。

男 おまえの狂った体。細胞に一切の整合性はなく、だからこそおまえは歴史の1ページ目としてばらばらの感情を持ち、ばらばらの人格でいるべきなのだ。人間になんかなるんじゃない、ひとつの感情に支配されているだけの人間に。知るがいいさ、自分という感情に侵された人間のくだらなさ。

怪物 おれは…

男 もう問いはやめろ。問うことを進歩だと考えるのはよせ。質問こそ自分ということに侵された行為に過ぎない。

怪物 おれの名前は。

男 名前などない！

怪物 あなたの名前は。

男 私の名。おもしろいことを聞いたな。私の名か。私は余計者だよ。

せむし、笑う。男も笑う。それを見てせむしはさらにはしゃぐ。

怪物、いたたまれないといった素振りをして走り去る。

男 逃げやがった。素直過ぎるやつだな。もっといろいろなことを聞いてくると思ったのに。そうしたら全部を話して聞かせてやるつもりだったのに。

せむし、なにかしきりに言う。

男 もう一体造れだ。なんでおまえはそう思うんだ。：歴史か。確かに私が本気で歴史に取り組む気にいるのなら。でも無理だよ、せむし。それは余計者の歴史なんだから。この言い草には最初から無理がある。余計者には歴史なんざいらないんだ。歴史を必要としないから私たちは余計者なんだよ。

せむし、泣く。

男 なにを泣いてる。おまえは感情を動かし過ぎるね。困るじゃないか、絶対の孤独を信奉する男の助手がそんなことでは。せむし、おまえに感謝するよ。おまえがいることで私は自分の孤独を鮮やかに認めることができる。からくりの画像を準備してくれ。

せむしは去る。

男 やつがついに私に会いに来た。こんな夜にはからくりの画像に限る。

テレビ・モニターが出現し、『フランケンシュタイン』あるいは『フランケンシュタインの花嫁』が流される。男はそれをじっと見入る。

●男は思った。フランケンシュタインものはやはりこれに限る。

●ケネス・ブラナーの『フランケンシュタイン』なんざ最低だ！

木戸が微かに鳴る。誰かが暗がりにいる気配。

男 やっぱりまだいたんだな。そんなに知りたいのか。知りたいならばこっちに来るがいい。なにもわからないということを知るがいい。黙っているな。私があんまり問うことを馬鹿にするのでその手できたってわけか。いいだろう。おまえはとことん私を追い詰めて、そっちのほうに引き寄せたいらしいな。おまえらがやってるあの分かり易過ぎるクソ芝居のほうに。私を登場人物にしようというんだな。いいだろう。だがほんの一瞬だ。この一瞬を逃せばそれで終わりだ。私はあの女と結び合わせるためにおまえを造った。わかったか。これでおまえたちを喜ばせるための一瞬は終わりだ。

暗がりから「クソ芝居たあ、ご挨拶だな」という男の声。男、暗がりを見る。せむしが影に蝋燭の火をやった。浮かび上がったのは座頭。

座頭 ばかやろう、熱いじゃねえか。

せむし、ひいひい逃げる。

男 あんたか：

座頭 来たんだな、あのやろう。

男 ああ。あんたの頭のいいふらんけんすうたいん先生の手引きでな。

座頭 あのばかやろうがつ。

男 遅かれ早かれここを見つけただろうさ。それより気に入らないのは私の役をせむしがやっていることだ。

座頭 先生、芝居見てくれたのかい。

男 ああ。まったく気に入らなかったね。

座頭 でも意外と感激したんじやありませんか。自分の造った化けもんが立派に舞台を努めていて。

男 今日実際に会ってがっかりしたね。

座頭 なぜ。

男 筋書き通りの人間になってしまった。あんたたちのせいだ。

座頭 でも久しぶりに会ったんだ。愛情ってやつも湧くもんだらう。

男 まったくないね。

座頭 本当に。

男 所詮はあんたに頼まれて造った泥人形だ。

座頭 冗談いっちゃいけねえ。造ったのは先生、あんたが先だ。

男 それなら私はなんのために造ったんだ。

座頭 そんなことあ、自分の胸にでもきいてくれ。今夜はもうぶちまけていうが、先生あんたがおみねと一緒になってくれりやあこんな事態にもならなかったんだ。

男 私が芝居小屋の婿にだと。冗談いっちゃいけない。

座頭 やいっ、このキチガイ医者、うちのおみねを疵もんにしてその上にまだてすさびにしてるったあいったいどういう料簡でいやがんだ。

男 私を筋書きの世界に引き入れようとするのはやめろ。私はからくりを造っておまえに渡した。

私は自分の仕事は果たした。十分だろうが。

座頭 ところがいざそうなってみると、昔の女が惜しくなった、てめえが造った化けもんにおみねをやるのが惜しくなった、とそういうわけで。

男 筋書きを勝手に作るな！

座頭 よっ、怒ったね。いいぞいいぞ、もっと怒りやがれ、この変態野郎、気取るんじやねえや、さあとっとと正直におみねにいつてやれ、おみねが片輪だから化けもんを代わりに押し付けたんだ

と。

男は黙り、やがて爆発したように笑う。

座頭 なんだあ、やけくそか。

男 筋書き作りの座頭は所詮そんな筋書きしか書けないんだな。

座頭 河原者っていいてえんだな、そういうてめえはなんだと思ってるやがる。

男 やられたんだ、おみねの額の目に俺は心底やられたんだ。隠している時はただの退屈な女だった。本当に惚れたのはあの目に見られてから、怪物と一緒に成るからのことよ。

座頭 なんだと。

男 額を隠し通せと教えたのはあんただろ、おとつあ。それが俺にはかえって仇だったってことよ。

座頭 なんてこった：

男 まったく痛快だ、人の思いの裏をかくってのは。

座頭 やつを消してくれ。

男 …

座頭 やつを消すやり方を教えてくれ。

男 無理だね。やつが宿した命は永遠だからな。

座頭 死なないのか、この先ずっと死なないのか、そんな馬鹿なっ！

座頭、混乱しながら走り去る。

やつと帰った」という女の声。せむしが蠟燭を照らすと人体の裏からおみねが出て来る。

男 おまえか：

おみね、ゆっくり笠を取る。

男 ああつ、その目！

おみね おまえとはどういうこと。

男 すみません、帝の君。

おみね おまえはだあれ。

男 犬畜生です。

おみね、半裸になる。

おみね もう一度。

男 犬畜生です！

ふたり、交わっていく。

男 ああ、帝の君様、あなたのその額の目、その目で見てください、その目で私を射貫いてください。

おみね ああ…

男 その目で…

せむしがにやにと見ている。持った蠟燭の火を移動させる。と火は闇に佇んでいた怪物の顔を照らし出した。座頭の生首をぶら下げている。

せむしは驚きのあまり動けない。怪物の全身が細かく震えている。せむし、唸り声を出すが変わるふたりは気がつかない。怪物、片一方の手の平でゆっくり顔を撫ぜる。と怪物の顔が一座の芝居で見せていた恐ろしい面の表情に変わる。

怪物、ふたりのほうに生首を投げる。

おみね ひiiiiiiiiiiiiiiiiっ！

怪物 おとっつあん！

怪物、男の首を締め上げて殺害する。おみね、わなわなしながら見守っている。

怪物 おのれ、女め！

せむしが怪物の背に飛び乗る。そのすきにおみねは逃げる。怪物はせむしを振り払おうとして回る。せむし、ついに飛ぶ。怪物はせむしを抱え上げ、何度も壁、地面に叩きつける。蠟燭の火が吊るされている人体に燃え移っている。火は広がる。怪物は小屋を出る。

燃え上がるスクリーン。

●この火災により『フランケンシュタイン』のフィルムは焼失した。

●しかし人々のフィルムへの欲望は果てしなかった。

●ロスアンゼルス。独立系映画プロダクションの会議室。

日系アメリカ人の映画スタッフが『フランケンシュタイン』の新たな映画化について議論する。

男ひとりと女ふたり。壁にはメアリ・シェリーとパーシー・ビッシュ・シェリーを巡る家系図が貼

ってある。

女1 メアリの母親というのは『女性の権利の援護』という本も出してフェミニズムの先駆者みたいな女性でね、メアリを生んでからすぐに死んでいるの。母親の死と引き換えに自分が生を受けたというのがメアリ・シェリーのトラウマだったってわけね。彼女は終生そのトラウマから逃れられることができなかった。皮肉なことに肉親の死から生をスタートさせた彼女の人生はそれから肉親の死に彩られたものだった。

● 1814年 メアリ、シェリーと恋に落ちる。メアリ16歳、シェリー21歳。

女1 この恋愛は駆け落ちだった。シェリーにはすでに妻子がいたし、メアリの父親が大反対したから。この父親ウィリアム・ゴドウィンも当時有名な急進的思想家でね、彼女はそもそも自由な気風
風の家庭に育ったんだわ。

● 1815年 メアリ17歳にして最初の娘を生むが、子供は生後まもなく死亡。

女1 名前もないままに逝ったこの子が死の一番乗り。

● 1816年1月 2番目の子供ウィリアムスを生む。

● 5月 メアリ、シェリー、義理の妹クレアは詩人のバイロンを追ってスイスに行き、レマン湖畔でバイロンとその侍医ポリドリと過ごす。

女1 レマン湖畔のディオダディ荘。このことは文学史として有名でしょ。ケン・ラッセルがこの時のディオダディ荘を舞台にして1986年『シックス』のタイトルで映画化してるわ。バイロンがここでホラー小説を各々書こうと提案してメアリは『ランケンシュタイン』の構想を練り始め、ポリドリが書いた『吸血鬼』は文学史上最初の吸血鬼小説。

● 10月 メアリの異父姉ファニー自殺。

12月 シェリーの妻ハリエット自殺。

女1 ハリエットの死によって12月30日、メアリとシェリーは正式に結婚した。

● 1817年 『ランケンシュタイン』を書き終える。3番目の子供クララを生む。

● 1818年 『ランケンシュタイン』出版。娘クララ、病死。

● 1819年6月 息子のウィリアムス、病死。

11月 パーシー・フローレンス生まれる。

女1 子供のなかで生き残って育ったのこのパーシー・フローレンスただひとり。そして彼女にとって決定的な死が降りかかる。

●1822年 夫のシェリー、ヨットで遭難して水死。

女1 2年後にはバイロンが病死するし、『吸血鬼』のポリドリもとくに服毒自殺を遂げている。青春時代の記憶とともにあった友人たちは皆若くして死んでいった。こんなにまで大量の近親者の死にあって彼女はよく生きていけたと感心するわ。強い女性なのよ。この強さはそのままこの時代に芽生えた女性の自我の力だと思うの。ここで小説のなかの死を思い出して欲しいわ。怪物は創造主であるヴィクター・フランケンシュタインの肉親や友人を次々と殺害していく。言うなればメアリは『フランケンシュタイン』を書くことによって自分に降りかかる肉親たちの死を予見していたんだわ。その予見の元が母親の死というトラウマ。自分の生が他人の死に支えられている、自分と関わる者たちはすべて死ぬという罪の意識。ヴィクター・フランケンシュタインの近親者を殺害する怪物は、彼女の原罪の表れ。それと同時に潜在的にあった彼女自身の殺意を彼女は怪物に託して代行させていた。だから怪物はメアリ自身なのよ。怪物の自我の形成、苦悩、葛藤、悲しみはフェミニストの母親を持ち、この時代、因習に囚われない自由な恋愛を主張実行し、自由な女性として振る舞ったメアリ本人なのよ。『フランケンシュタイン』はフェミニズム小説として読まれるべきなのよ。

ほかのふたりは拍手する。

舞台はアメリカのTVコメディ番組ふうに笑い声が入れられる。

男1 だから。

女1 だからって。

男1 そいで。

女1 先月から言ってるじゃない、この映画で怪物は女にするべきだって。 笑い)

男1 うーん。

女1 一体なにが不満なの、ジャック。

男1 うーん、当たればいいんだけど。 笑い)

女1 当たるわよ。当たるだろうし、こうじゃなければあたしとリンダが『フランケンシュタイン』を映画化する意味などまるでないじゃない。ねえ、リンダ、あなたもなにか言って。

女2 確かにキャシーの解釈はまっとうだわ。でも問題はそれで映画が成立するかどうかね。

女1 なんて急に弱腰になるの。

女2 思い出したのよ、3年前のこと。キングコングを雌に設定して大失敗したじゃない、あたし

たち。忘れたいけどどうしても思い出しちゃうのよ。

男1 レディ・コングだったっけか。悲惨だったね、あれ。笑い

女1 なにさ。少しかり時代より早過ぎたのよ。今なら大丈夫よ。

男1 おいおい、まさかあれを繰り返すために私が金を出すってことじゃないだろうな。女1 今度は大丈夫よ。きちんとした論理的裏付けがあるんだから。

男1 ああ、その論理的裏付けってやつが怖いんだ。

女1 あなたの意見ってなんなの、ジャック。はっきりして欲しいわ。

男1 当たればいいんだけど。

女1 だから当たるわよ。

男1 怪物は美人のグラマーだな。笑い

女1 だめよ。

男1 なんて。

女1 なんでメアリ本人としての怪物を男たちの目を楽しませる対象でなくちゃならないのよ。

男1 メアリはブスだったの。笑い

女1 ブスではなかったと思うわ。

男1 ならいいじゃないか。シャロン・ストーン系の女サイボーグの線でいけるじゃないか。笑い

女1 なんとかいってやってよ、リンダ。

女2 ジャック、あなたの意見もわかるけどサイボーグにするとゴシック的雰囲気はなくなるし、怪物の迫力も望めないわ。

男1 いやいや、そもそも女は怪物だよーん。笑い

女1 ふざけないで。とにかく怪物のデザインはトムにやってもらってるから。それができあがってから話し合しましょう。

男1 トムは君の意見を取り入れようとしてるんだな。

女1 もちろんよ。彼が作ってるのは女の怪物。もうすぐここに持って来るはずよ。

男1 遅れるんじゃないか、黒人の暴動が起こってるってニュースでいったぞ。

女1 えー、今度はなにが原因。

女2 韓国人との対立らしいわ。韓国人は外を歩けないって。

急に男1が去る。

女2 ちょっとどこ行くの、ジャック。

男1、戻って来る。

男1 いやあ、納豆を取りに。

女2　なんで。

男1　襲われそうになったら食べようと思って。これなら相手に日本人だってわかるだろ。　（笑い）
女2　話を元に戻すけど、怪物は女で設定するとして…

女1　ねえちょっと思ったんだけど、怪物っていう言い方やめて人造人間にしない。なんか怪物って差別的じゃない。

女2　それもそうね。

●これより『怪物』は『人造人間』になる。

女2　人造人間は女にするとしてフランケンシュタインはどうするの。これは変えずに男なわけ。

女1　どういうこと。

女2　これだと男が女を作ったという図式に当てはまるじゃない。それでいいの、キャシー。

女1　フランケンシュタインも女にすればいいってことだわ。　（笑い）

男1　おいおい、パット・モリタも真田広之もやる気なんだぜ。

女2　それだったらフランケンシュタインが人造人間を作るっていう意味はなんなの。人造人間が目覚めた女として生きるというならフランケンシュタイン自身がそう生きればいいことじゃない。

女1　フランケンシュタインを当時の因習に囚われた女として描いて人造人間の対立項とするのよ。

女2　因習に囚われた女が人造人間を作ろうなんて思うかしら。

女1　逆にすればいいんだわ。フランケンシュタインは新しい女で、時代に迎合されていこうとする人造人間を必死で教育しようとするの。

女2　だからなんでフランケンシュタインは人造人間を作らなくちゃならなかったかよ。

女1　女性の進化のためよ。

女2　そのために人造人間を製造するなんて嘘っぱちだわ。自分がそう生きればいいことなんだから。なんで人造人間にそのことを託さなくちゃならないのよ。

女1　わかったわリンダ。あなたは人造人間を女にするってことに反対なのね。

女2　そういうつもりはなかったんだけど、どうやらそうなったようね。

女1　それじゃあ、私たちが今フランケンシュタインを映画にする意味ってなんなの。

男1　真ん中をとってオカマにするってのはどうかな。　（笑い）

女2　ジャック、納豆を食べてて。　（笑い）なぜフランケンシュタインが人造人間を作らなければならなかったのか。それはキャシー、あなたがさっきレポートしたメアリの人生と関わってくると思うの。近親者の死。まわりの人間が次第にいなくなっていく感覚。誰もがいずれ味わうことになる不在の意識。

女1　不在ですって。それならブラナーの『フランケンシュタイン』と同じだわ。母親の死の絶望感から人造人間を作ったというのが彼のフランケンシュタイン解釈なんだから。それじゃあまったく平凡よ。

男1 平凡でいいんだよ。平凡なのが一番売れるんだ。

女1 そんな考えはフランケンシュタインの理念に反するわ。平凡さを拒絶しようとした人間こそフランケンシュタインじゃない。ここで私たちが平凡さに屈服するとしたら冒涇よ。不在じゃなくて過剰よ。人造人間はフランケンシュタインの過剰な熱情から生み出されたのよ。

● 過剰

● 過剰について

女2 なにその過剰って。

銃を持った黒人の男が入ってくる。男1は必死で納豆をかき回し、食べる。

男1 日本人ですから、私は日本人ですから。

「いやー、まいったまいった」と男2は黒人のマスクを取る。

女1 トムったら！

男2 いやー、連中黄色い皮膚と見ると見境なく襲ってくるんでね。ここに来るのにも命懸けだよ。なにやってんだいジャック。

男1 納豆の栄養素は抜群なんだ。

男2 ああ知ってるよ。

女1 できたのね。

男2 ああ。

男2は机の上に箱を置く。

女1 出来はどう。

男2 大自信作さ。

男1 楽しみだな。

男2 われらがフランケンシュタインの怪物！

現れたのは黒人女性の人造人間の頭部。一同絶句。爆発粋な笑い。

男2 どうだい、この斬新な発想。 笑い

女1 な、なんで。

男2 女にしようってのは君のアイデアだろ、キャシー。

男1 まあ当たればいいんだけど。

部屋の外から暴動のノイズが聞こえる。男1が窓際に寄る。

男1 車から引きずり降ろされてるよ。殴られて蹴られた。ぼこぼこにやられてるよ。何系だかはわからないな。日系じゃないな、韓国系か。中国系ってこともあり得る。

男2 なんだよ、みんな一体どうしたってんだよ。

女1 だって黒いじゃない、これ。

男2 黒い。黒いだって。そうか色のことか。この色が君たちは気に食わないってことか。

女1 気に食わないっていうより、なんで黒くなくちゃいけないのよ。

男2 逆に聞くけどなんで黒くちゃいけないのさ。

女1 だってこれは『フランケンシュタイン』でしょう。

男1 その通り。よくぞ言ってくれたよ、キャシー。われわれが撮ろうとしているものは『フランケンシュタイン』なんだよ。

男2 『フランケンシュタイン』だからこそ、黒人なんじゃないか。はっきり言ってぼくは今唾然として声も出ない。

女1 しゃべってるじゃない。

男2 まさしく君たちのような人たちがいるからこそぼくのフランケンシュタインは描かれるべきなんだ。なぜって小説のなかの怪物こそ今の黒人そのものだろう。

女1 人造人間っていつてよ。

男2 そんなことで問題が解決するものか。排除され続ける怪物こそ黒人として描かれるべきじゃないのか。

女1 スパイク・リーにもってったら。笑い)

男2 差別主義者！

男1 ああ、いつもこいつも女だ黒人だと勝手なこといいやがって。俺は普通のフランケンシュタイン映画で十分なんだ！差別だ排除だとぬかすんなら、われわれ日系もここでは十分差別されている！ 笑い)

女2 それもそうだわ。日系の女の人造人間というのはどうかしら。

女1 GOOD IDEA！

男2 黒人のほうが日系より人口が多いんだ、黒人にしたほうがこの国では当たるんだ。

男1 ええっ！それなら黒人でいいなあ。笑い)

女2 なんで私たちが黒人の映画を作らなければならないのか、詰めた議論が必要だわ。

男2 その発想はナシヨナリズムだな。ベルトリッチはイタリア人のくせに中国人の映画を撮ったぞ。笑い)

女 2 私はあの映画は認めないのよ。

男 2 いいかい、ぼくたちはみんなアメリカ人だぞ。黄色いアメリカ人が黒いアメリカ人のことを描いてなにが悪いってんだ。

女 2 楽観主義ね。皮膚の色で現実には私たちは区別されてるじゃない。

男 2 差別主義者！

女 2 楽観主義者！

男 1 議論はやめだ！

女 2 商人！

女 1 広告代理店！

男 1 うわわわわわわ！

男 1、やけくそで納豆を食べる。盛大な笑い声が続く。ガラス窓が割れ、なにかが投げ込まれてくる。男 2 が手に取る。空のコーラ壺に差し込まれた紙切れ。取り出して読む。

男 2 ホワイトもイエローもぶっ殺す」

男 1 決めた！人造人間は女で黒人でエイズ患者で難民っていうことにしよう、それならどこからもう文句は言われないはずだ。

ドアを乱暴に叩く音。一同緊迫。再び音。

男 1 どなた。ここにるのはみんな黒人ですけど。 笑い

大造人間です」という声と同時に出て来る巨大な男。ひょっとこのお面をつけていて表情は見えない。巨人座る。

男 1 あの、どちら様で。

巨人 だから人造人間です。

男 1 どういった御用で。

巨人 お邪魔ですか。そうなら言ってください。

女 1 いいえ、全然。あなた本当に人造人間さん。

巨人 ええ。フランケンシュタインを企画しているところがないかハリウッド中を尋ね歩いて、ようやくここに辿り着きました。参考になるというなら私の話を聞いて欲しいと思って。

男 1 ちょっと、あんたねえ：

女 1 聞きます。聞かせてあなたの話。

巨人 始めに死体があった。女も男もない、ただの死体だ。私の父は死体に意味をつけた。このこ

とが人間にとって得なのか損であるのか私にはまだわからない。物語は死体から始まる。

男1　なんだシナリオの売り込みか。5分以内でしゃべってくれよ。

●しかし人造人間の話は2時間、3時間と延々と続いた。

灰皿には吸い殻の山。ハンバーガーの紙くず、デリバリーの食べ残しなど。疲れた様子ながらそれでも4人の男女は巨人の話を聞き続けているらしい。

巨人　その時代のことはわからないのです。意識の冬眠とでもいうのでしょうか、1、2年の間、長いときは10年単位で脳細胞が停止する。自分でもよくわからないのですが、そのくせ身体は行動しているらしいのです。私がこんなに生命を持続していられるのはこの意識の冬眠のせいとも推測しています。とにかく記憶の流れは実に曖昧で、ある時代についてはまったくの闇のなかですし、どれが前でどれが後だったかもわからなくなる。

男2　まあ150年以上も生きてれば無理もないわな。

女1　女性が劣ったものとして扱われているのが気になるわ。

男1　いつまでつきあう気だよ。

女2　いいじゃない、どうせ暇なんだし。おもしろいストーリーじゃない。

男1　冗談じゃない、膨大な製作費が必要だよ。

女2　ひとつ質問をしていいかしら、人造人間さん。

巨人　どうぞ。

女2　話はわかったけど、この間あなたはどう食べて生きてきたの。

男1　いい質問だ！

巨人　私は森を棲家にして来ました。野草の葉や木の芽、根っこを食べ：

男2　ベジタリアン！

巨人　いえいえ、たまには小動物を捕らえて栄養にしていました。しかし森にいる日々というのは意識の冬眠の時で自分でもよくわからないのです。自分ではただ草木の香りに囲まれて穴ぼこのなかでじっと瞑想に耽っていたような実感しかなくて。体がどうやら勝手にそうして狩りをしていたようなのです。

男1　ご都合だな。

女2　黙ってなさいよ。あなたの映画だってみんなご都合じゃない。

部屋が揺れる。

女1　大きいわよ。

男1　机の下、机の下。

男2 こりや前のより大きいぞ。

巨人 そうです、あの時巨大な大地の揺れが私を森から呼び覚ましたのです。

● 1923年大正12年 関東大地震、帝都を直撃

瓦解した街を人造人間が行く。汚れた布の袋を頭に被り、顔を隠している。棒切れを持った男が背後に立つ。

男 なんだ、おめえ。顔を見せろ。

人造人間 …

男 顔を見せろよ。

人造人間、無視して去る。

男 チョンだ、チョンがいたぞお！

人造人間、武装した人々に捕らえられて出て来る。ひとりが袋を取る。悲鳴、驚愕。人々、罵倒しながら人造人間に暴行を加える。弱った人造人間を傍らの井戸に落とす。

汽笛の音。列車の走りだす音。井戸の場所を起点にして線路が続いている。井戸は線路に行く。ハイデガーの『存在と時間』が朗読される。

● 列車のなかは立錐の余地もなかった。停車の気配があった。それでもまだ私には希望があったのだ。

● 空に聳える四角い煙突から立ち上る黒い煙り。

ナチスの軍服を着た若い将校。軍隊行進の仕方が歩きながら本を読んでいる。

人造人間が党員と医師によって連行されてくる。人造人間は縦縞の服を着ている。

医師 この男です。ご覧の通り、頑健です。服を脱いで。

人造人間、裸になる。傷跡が露わになる。最後に顔の袋を取る。

医師 国籍は不明です。証明するものをなにも持ち合わせていません。口を聞きません。どうやら精神薄弱のようです。不思議なのは体です。人間ではありません。この男は言うなれば人造人間です。貴重な研究材料であることには間違いありません。

将校 人種衛生のための。

医師 ええ。しかしこの男がその模範にあるというわけではありません。模範どころかまったく対局の存在かも知れない。体の部分部分が各々違う構造から構成されているのです。絵に書いたような雑種です。

将校 この男とふたりにしてくれ。

党員と医師は去る。

将校 座って。：言葉はわかるんだな。言葉どころじゃない、みんなわかっているんだろう。とぼけなくてもいい。怯えることもない。君はここでは死なない。いずれ君のようなものが紛れ込んでくると予測していた。私たちはもうここまで来てしまったのだから。ブランデーを飲めるかな。：安心したまえ、どこから来たなどという凡庸な問いは吐かないさ。ここだけの話だが民族の概念にはうんざりしてるんだ。君が 在る」というだけで私は満足だ。私がこうして 在る」と同じように。君は私たちと同類だ。だから私たちは人造人間といったって驚きやしない。私たちは君を受け入れる。世界中どこを捜してもこんなふうにして君を受け入れる場所はありません。君がそのことを一番よく知っているはずだ。私は知っている。君の目の光り。総統と同じ光り。実は総統も人造人間なんだよ。：ハハッ、冗談だよ、本気にしたな。そう怒りなさんな。お詫びに一緒に映画を見ようじゃないか。わかっているんだ、君も私も映画を見るのが好きだ。

将校、紐を引くと幕が左右に割れモニターが現れる。ビスコンティの『酴獄に堕ちた勇者ども』がかかる。

●人造人間が命じられた仕事はガス室の清掃だった。

●その一方で『人種衛生研究所』では人造人間の研究が進められた。

靴の山。

●研究者たちは人造人間に死体を選ばせた。それらの人体から新たな人造人間を造り上げた。

靴の山に電流が流れる様子。靴のなかから女の人造人間が現れる。裸体で皮膚の縫い合わせが生々しい。髪の毛はなく、骨格が浮くほどに痩せている。

将校たちが出てくる。

●研究者たちは人造人間に人造人間どうしの性交を強制した。生殖によりどのような生命の誕生をみるかが目的だった。

一方に女と同様に裸体の人造人間が佇む。ふたりは向き合い、やがておずおずと抱擁し合う。背後で第二次大戦のニュース映像が流される。

●戦争のあいだ、人造人間は初めて穏やかで落ち着いた日々を過ごした。それは人造人間が長い間夢見ていた生活だった。女の人造人間は妊娠した。

●しかし日々は続かなかった。連合軍の優勢によりナチスは退却を余儀なくされ、収容所の証拠となるもの一切焼き尽くそうとした。研究による成果もそのひとつだった。

ふたりをナチの兵士たちが囲む。人造人間を押さえ込む。人造人間は抵抗して兵士たちを投げ捨てる。火炎放射によって女の人造人間は焼かれる。人造人間にも火は放射される。人造人間、叫び声を上げながら井戸に飛び込む。

●生還した人造人間はナチスの協力者として非難を浴び続けた。ナチスの将校の言葉通り 皮肉なことに彼を受け入れたのはナチスだけだったのだ。

●休憩

人造人間の飛び込んだ井戸に再び線路が引かれており、来た途を帰還していく。玉音放送に乗って。着いたところは焼け跡の東京。復員兵が水を飲もうとして井戸を覗く。火傷の跡も生々しい人造人間が頭を出す。

復員兵 うわっ、びっくりしたあ。なんでえ、あんた。おっこったのか。手を貸すぜ。

人造人間、引き出される。全身が火傷である。

復員兵 ひっでえ火傷だなあ。おい、あっちにマッカちゃんたちが建てた臨時の病院あっからよ。ついてきな。おい、ひとりで歩けるか、肩貸すぜ。

闇市の屋台。『うんごの唄』傷を負った復員兵、人々。包帯姿の者あり、片腕のない者、片足のない者。犬。そのなかを包帯姿の人造人間がきよろきよろとあたりを見回しながら行く。

●人造人間は自由を感じた。一切を失った東京は人造人間を受け入れたからだ。

夕暮れからやがて夜になる。屋台は閉じられ、人造人間は道端に横になる。

犬の遠吠え。人造人間は反応して身を起こし、遠吠えを真似る。犬がやって来て寄り添う。犬は肉を加えている。人造人間と犬はその肉を食べる。食べ終わると人造人間は大きく深呼吸して犬に語りかける。

焼け跡の夜は美しい

廃墟の夜は偉大だ

ここで吸う酸素は森の空気と同じだ

どこまでも見渡すことのできる透き通った森

ひしゃげた水道の蛇口から洩れる水滴はせせらぎで

曲がった鉄骨の骨組みは春を待つ木々

闇は本来の暗さを取り戻した

本来の暗さとは明るさなのだ

廃墟の夜は森の明るさを取り戻した

わたしたちは森で暮らす裸の人種なのだ

慈しみと純粋な悪意が復活する

慈しみは美しく

悪意は偉大だ

私は焼け跡から美しさと悪意に向けて旅に出る

刻印されていない記憶と融合することのない細胞に向けて

廃墟から旅立ち廃墟に立ち戻る

夜の果ての旅

人造人間と犬を焼け跡の少年たちが囲む。

少年 おっさん、その犬こっちに渡しな。

人造人間 来たな、森の猛禽類たち。

少年 犬を寄越しな。

人造人間 私は受け入れよう、この森の悪意もまた。

ひとりがこん棒で人造人間の頭を叩く。それを合図に袋だたきにする。犬は瀕死でひとりに連れ去られる。ふたりのMPが警笛を吹きながら走って来る。ひとりには少年たちを追い、ひとりには倒れた人造人間を見下ろす。

MP とんだ夜の果ての旅だな。

人造人間。M Pを見上げる。

M P 驚くのは無理もないな。ずっとひとりだと思っていたんだろう。ぼくも最初はそうだった。

M P、右手を差し出す。

M P 会えると思っていたよ、わが友人。人造人間に栄光あれ。

人造人間、呆然としたまま。M Pは手を引っ込める。

M P さっきから君のエネルギーを感じていた。すぐにエネルギーを感知できた。君の言う通り夜の廃墟の空気は透明だ。意識すれば君もこの能力を開発できる。自分がひとりではないという認識がほかの仲間のエネルギーを読み取るコツだ。ただ今までも意識せずに読み取ることもしているはずなんだが、心当たりはないかな。

人造人間 細胞に痛みを感じる：

M P それはどこかほかの場所の仲間の痛みだ。意識の喪失は自分の体を置いたまま君がほかの仲間の胴体に浸透していった証拠だ。だから君は意識すればどの仲間の体にも乗り移ることができる。それがぼくたち人造人間に課せられた特権だ。：まだ半信半疑だな。わかるよ、お互いのことを知るまでは自分がこの世でたったひとりの存在であると信じてたんだしな。ぼくがぼくたちであることを最初に教えたのは亡命してきたドイツの人造人間だった。なぜぼくたちはぼくたちどうしを感じるができるのか。それはぼくたちがばらばらの細胞で出来ているからなんだ。体のどの一部をとってもぼくのものではない。ぼくはぼく自身ではない。だからぼく自身ではないぼくはぼくたちの体でいることができるんだ。彼はぼくにそう教えて誇りと勇気を与えた。この戦争のおかげでぼくは各地へ赴き、仲間たちと会うことができた。こんなことを言ったからといって気を悪くされちゃあ困るが、どうやら君がそのなかで一番意識の遅れている人造人間だな。もっと自分のことを知らなくちゃ。

少年たちを追って行ったM Pの声がする。

M P 今夜はもう時間がないから失礼するよ。会えて嬉しかったよ。君はいつもこのあたりにいるんだな。とりあえず学習の材料を言っておこう。読んだったらメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』、見るんだったらジェームズ・ホエールの『フランケンシュタイン』。そこにぼくたちのことが描かれている。ただまだこの世界じゃ大っぴらに名乗らないほうがいいな。なあにいい時代が来るだろうさ。人造人間に栄えあれ。

M P、再び手を差し出す。人造人間、その手を握る。M P、去る。

人造人間、枝の切れ端を取り上げ地面に書く。

人造人間 め・あ・り・し・え・り・い・ふ・ら・ん・け・ん・し・ゆ・た・い・ん。

舞台はどこかの小部屋。小さな机を挟んで男と女が座っている。机の上にはテープレコーダー。男は背が高い。この男は人造人間である。だが顔立ちは普通である。

●犯罪心理分析官。FBIで訓練を受けた女性。

女性 彼とはそれっきり。

人造人間 いいや、それから何度も会った。いろいろなことを教えてもらった。毎日毎日目から鱗が落ちる思いだった。英語も教わった。GHQの建物のなかを自由に歩くことができた。そのの娯楽室で西部劇とともにフランケンシュタイン映画を何本も見た。私は目覚めた。

女性 それから。

人造人間 英語ができたので英会話に関わる仕事に就いた。顔の包帯は戦争のせいと思って誰も気にしなかった。金を貯めて整形手術にかかった。このこともMPの人造人間に忠告されていたことだった。整形外科が新しい技術を獲得するたびに手術にかかった。

女性 見た目ではまるっきりわからないわ。

人造人間 ああ。驚くべき技術の進歩だよ。

女性 まるでマイケル・ジャクソンね。

人造人間 ああ。彼も人造人間の仲間だよ。

女性 なんですって！

人造人間 彼とはよく交信し合う。彼は今苦しんでいる。私にもそのことがよくわかる。人造人間の特性だ。いくら普通を装っても世界との完璧な和解は不可能だ。

女性 あなたもそうだったってこと。

人造人間 その通り。

女性 世界との完璧な和解は不可能だったと。

人造人間 急に一切を捨てたくなった。160年の人生だ。もう欲望につきあうのにはうんざりした。幾度も死のうとも考えた。だが自殺は不可能だった。

女性 なぜ。

人造人間 仲間たちがそのことを察知して止めるからだ。

女性 そのお仲間というのは世界に何人いるの。

人造人間 正確にはわからないが、2000人ほどじゃないだろうか。

女性 でも160年生きてるにしてはホント元気ね。

人造人間 まわりの人たちは老いていくというのに私だけが死なない。生きていくということは、

知っている人たちが次第にいなくなっていくことだ。私はすべての知り合いの葬式に立ち会うことができてしまう。この苦痛がわかるだろうか。だから私はある時点で人と知り合うことをやめた。

女性 あなたの孤独癖は裏付けがあるってわけね。

人造人間 最初に立ち返っただけだ。

女性 贅沢だわ。

人造人間 知らないからそう言えるのさ。衰えることの不可能。

女性 苦しい。

人造人間 ああ苦しいね。その苦しさにも慣れたが。月日が経てばなんにだって慣れる。女性 人生の達人ってわけね。

人造人間 そんな呑気なものでもない。ここに入れられてから苦しみについて記録している。

女性 よかったら見せてくれない。

人造人間 かまわないが独房に置いてある。

女性 誰か取ってきてくれない。…あなたは自分のことを話すのが上手ね。

人造人間 ああ。今まで何度も話してきたから。

女性 物語ができたのね。

人造人間 ああ。残念ながらね。

女性 残念。

人造人間 残念だな。私もご多分に洩れずただ「在る」ということに耐えられないんだ。

男性が一冊のノートを持ってくる。女性は表紙をめくって読む。

女性 「始めに死体ありき。」意味の深そうな書き出しね。

人造人間 いいだろう。

女性 ベストセラーでも狙おうというの。

人造人間 あなたは意地悪だな。

女性 今日はこれぐらいしておきましょう。また話を聞かせてちょうだい。

人造人間 おもしろいのかね。

女性 ええ。

人造人間 あなたは変わってるな。

●199×年8月・男子中学生連続殺人の容疑者として人造人間は逮捕される。

ホームレスの生活をしていた人造人間はホームレスたちに暴行をくわえたり、住居であるダンボールに放火のいたずらをしていたとされる中学生5人を次々に殺害していった。人造人間は容疑を認めたと、弁護側は面談によるセラピーを兼ねた犯罪心理分析を試みた。

再び小部屋。人造人間と女性が向き合っている。

人造人間 私がいうのも変だけど、あなたは疲れてるみたいだな。

女性 ご親切に。正直に言うわ、その通りよ。続けていくうちにあなたのバカげた話に引き込まれそう。

人造人間 光栄だな。

女性 プロファイアーにとってはね、犯罪者の話に聞き入ってしまうことが一番危ないことなの。そうやって脱獄の手引きをしてしまった人もいるぐらいなんだから。凶悪犯はみんなそうよ。人を自分のほうに巻き込むことの天才。

人造人間 私は凶悪犯か。

女性 ええ。少年たちを殺害したのは事実なんだから。もう腹の探り合いは前回限りよ。私はあなたにすべてのカードを見せることにしたの。

人造人間 カードを見せては勝負にならない。嘘だろう。戦略を変えたな。

女性 あなたが頭が切れるってことはもう十分にわかったから。改めて聞くわね、あなたは一体何者。

人造人間 それと一緒に今探ってるんじゃないか。

女性 確認するけど私はあなたの味方よ。弁護できる手掛かりをちょうだい。

人造人間 作り話というのか。

女性 化政時代から生きてきたなんて話信じられると思ってるの。

人造人間 それならそれでいい。

女性 カードをぶっちゃけるわよ、あなた自分のなかに複数の人格がいるって意識はない。人造人間 多重人格症ってことか。でも多重人格症患者というのは普通自分の過去を話したがないものなんじゃないか。私の饒舌ぶりはどうしたもんかね。

女性 都合の悪いことは隠してるんじゃない。もし多重人格症患者ならばあなたの本当の人格を引き上げることが先決だわ。

人造人間 今の私は本当の人格じゃないと。

女性 だってあなたは戸籍もパスポートもない人間なのよ。まだ本名である人格が表に出てないってことよ。あなたの本当の記憶が知りたいの。あなたも知りたいと思わない。

人造人間 そんなふうに見えるとは悲しいね。

女性 自分では意識してないのね。あなたのばらばらの記憶は複数の人格を持っている証拠よ。そのことを自覚して。

人造人間 確かに私はばらばらの記憶を持っている。ばらばらの体。殺戮の記憶の断片で集合体。

女性 あなたは誰：どこから来たの。

人造人間 根源的な問いだな。しかも嫌になるほど凡庸だ。問いを問い続ける凡庸な人間。女性 自分はそうじゃないといたいいのね。

人造人間 問いを問うことが進歩だと考えるそのこと自体が自分ということに侵された行為なんだ。

女性 なにをいってるの。

人造人間 父のことを思い出した。

女性 そのことをもっと聞きたいわ。

人造人間 これだけのとき。すぐに死んだからな。私が殺した。

女性 それは以前に聞かしてくれた女の子の前。

人造人間 後だったな。

女性 聞かせてくれない。

人造人間 どっちを。

女性 あなたの好きでいいわ。

人造人間 あの殺人には季節が関係していたように思う。お湯の表面に夕暮れ間近の日の光りが反射していた。女の子と私の顔がそのなかで揺れながら映っていたはずだ。蟬が鳴いていたし、遠くで行商人の声もしたな。私には生命というものの実感がなかった。それは揺れる水面のせいかもしれないし、少女の肌に浮かんだ水滴がずっと皮膚を伝って落ちていくのを見ていたせいかもしれない。それは感情ではなく、なにかの力だった。少女が浸かった水のせいかもしれない。少女の生命の実体が溶け始めたような気がして私は少女と自分との境界を失った。だから私にすでに暴力という認識はなかった。感情の爆発への設定は確かに完璧だったが、私を動かしたのは感情ではない、もっと別の力だ。ただなにかの力ってのは感情とは関係なくせに感情の舞台装置の場から出てくるから始末に困るんだ。

女性 それが最初の殺人。

人造人間 ああ。

女性 なにかの力ってなに。

人造人間 その力はただばらばらの体から生まれた。私には自分という意識がなかった。それからすぐの殺人に関してもそうだった。私は私を生んだ父と育ての父を同じ日に殺害した。なにかの力を知りたいために私は行なったのかも知れない。私は結局わからなかったが、殺害後その力から自由になった。それから、ばらばらの体それぞれに、記憶がばらばらのまま棲みつくようになったのは。その記憶の群れが私に少年たちを殺させた。私という自分が殺したのではない、記憶と体があったのだ。

女性 あなた、犯行をよく覚えてないのね。

人造人間 記憶は欠落している。

女性 それじゃあ、殺害の最中自分がネオナチ、ネオナチって叫んでいたことも覚えてない。

人造人間 ああ。仲間の体のほうに旅をしていたんだろう。

女性 あなたに記憶は残らないのね。

人造人間 記憶は仲間の体のものになる。

女性 その時、体の持ち主の意識はどうなるの。

人造人間 ほかの仲間の体に行ってる。私たちに確固とした自分はない。器と記憶を共有し合って

いる。意識と記憶は分離している。だから記憶は私のもので同時に仲間のものとなる。

●プロファイアーはドイツの新聞を調べ、人造人間の犯行と同じ日、ナチスの絶滅収容 所から生還したユダヤ人がネオナチの青年を射殺したという記事を発見した。

●2年にわたる裁判では人造人間が多重人格症であるという弁護側の主張は受け入れられず、死刑の判決が下された。

●プロファイアーは『ある多重人格者の告白』という本を出し、印税を大いに稼いだ。
独房の人造人間。机に向かって書き物をしている。すぐに観客の存在に気がつく。

人造人間 いやあ。やってみるとなかなか快適なものですよ。書き続けているんです、自分のこと。あの女の本読みました。もう嘔然としましたよ、人のことダシにしてもう言いたい放題でいい加減なことばっか。あったまに來ましてね、こうなったからにはなにがなんでも自分のことは自分で残しておかなきゃって決意したんですよ。でもね、どうしてもうまくいかないのは、いつもの癖ってやつで思い出がどこでどう繋がっているのか、どっちが前でどっちが後か、まるっきりわかんなくなっちゃうんですよ。おれってホントあったま悪くてねえ、もうやんなっちゃう。おおい、看守さあーん、看守さあーんってば。お茶ちようだい、お茶。

看守茶碗を持ってくる。格好は市販の怪物マスクを被ったステレオタイプの怪物像。

人造人間 これ看守のカワムラさん。私がお世話になってるの。ほれカワムラさん、挨拶して。

看守 カワムラです。どうも。

看守去る。

人造人間 愛想のねえやつで困っちゃうなあ、ホント。まあいいや、書こうつと。大造人間は若くて晴れやかだ。人造人間は仕事にあたっていつも新鮮さを保っている。人造人間はいかなるヴィジョンも思い浮かべていない。ほとんど欲望というものがない。破壊されたものの代わりになにが立ち現れるかなど知ったことではない。人造人間は言わばシグナルである。人造人間は理解されることには全然興味を持たない。人造人間は平気で人に誤解させておく。人造人間は歴史的な人間という自覚を持っている。歴史的な人間の心情は事物の成り行きにたいするやみがたい不信であって、いつでも何もかもだめになるかもしれないということに入念な注意を払っている。従って人造人間はほかの誰よりも信頼がおける。人造人間はなにもものも持続的とは見ない。しかしそれゆえにこそ人造人間には至るところに道が見える。至るところに道が見えるので人造人間自身はいつも岐路に立っている。いかなる瞬間といえども次の瞬間がどうなるのかわからない。既製のものを人造人間は瓦礫に返してしまうが、目的は瓦礫ではなくて、瓦礫のなかを縫う道なのだ。人造人間が生きて

いるのは、人生は生きるに値する、という感情からではない。自殺の労をとるのはむだだという感情からである。　ウオルター・ベンヤミンより）」

テレビ・モニターに20世紀の映像が流れる。戦争。天災。栄光。暗殺。和解。破壊。かつてのMPが現れる。彼はベッドに横たわっている。

人造人間　やあ久しぶりだなあ。そっちの体に移ってもいいかい。

MP　やめといたほうがいい。いいことはないぞ。

人造人間　なんだよ元氣ねえじゃねえか、どうした師匠。

MP　病気にかかった。なんだと思う。驚くなよ、癌だ。

人造人間　そいつあなんていったらいいか：

MP　もっと素直に驚いたらどうなんだ。癌っていう野郎はすごいね、おれたちの細胞も食いつくそうっていうんだから。

人造人間　痛いのか。

MP　ああ。初めての体験だな。体の痛みっていうのは。

人造人間　治療は。

MP　抗がん剤の投与はやめてもらった。もう十分だ。ホスピスの態勢でゆっくり死を待つき。あれほど懂れた死だ。それにしても皮肉なもんだ。初めて人間としての扱いに導いてくれたのが癌っていうのはな。

人造人間　気に入らないな。やけに自虐的じゃないか。人間としての扱いだって。そんなことどうだっていいじゃないか。誇りを持つべきだと教えてくれたのはあんただろう。

MP　その通り。君はおれなんかよりよっぽど強かったんだ。民族性の問題かも知れない。人造人間　おいおいやめてくれよ、民族性だなんて。おれたちに民族もくもあるものか。MP　そう思えるのは若くて元氣だからさ。

人造人間　160歳の男になに言いやがる。

MP　宗教の問題もあるな。君は最初から神を持っていないだろう。ところがこっちはそうはいかないんだ。キリストという人間の親玉がいるからな。

人造人間　キリストこそ最初の人造人間じゃなかったのか。

MP　ずっとそう信じて来たんだが、戦争がおれにその説を変えさせた。あれからこの国が関わったすべての戦争に参加した。まわりの若者たちは死におれだけが生き残った。残された遺族たちに彼らの死を知らせることはおれの役割だった。遺族たちは神に祈った。おれは思ったよ、なぜおれだけがいつも生き残っている。キリストが人造人間だとしても彼は自分が人造人間だからこそ人間を愛せたんだ。彼も知っていたんだよ、自分がどれほどまでに人間の余計者かってことを。：癌に感謝しなくちやな。

人造人間　そっちに行かせろよ。

M P やめといたほうがいい。

人造人間 体の痛みを独占する気だな。そうはいかないぞ。

M P おれは今枕元にバイブルを置いている。

人造人間 行くぞ、そっちに。

人造人間の姿は消える。 大造人間が乗り移った） M Pは苦悶する。

M P あいつこの痛みによく冷静にしゃべれたもんだな。 あつ、ああつ！

M P、しばらく苦しみ、やがて小康状態を保つ。 ナチスの将校が現れる。

M P ああ、あなたでしたか。 いやいや私のことは心配なく。 それよりあなたですよ、あなたはどうしました。

将校 ：

M P 相変わらずですね。 その制服。 イメージの鎧のなかであなたはじっと黙っている。 イメージの奴隷。 あなたはどこにもいない。

将校 違うな。 イメージを壊したってそこからなにか出てくるわけではない。

M P だとするとあなたは誰なんです。

将校 問いを問うことで満足するな。

M P やっぱり：確かに私は最初に父にそう言い聞かされた。 でも最近それに疑問も感じ始めました。 すると私たちに残された道というのなんなのだろうって。 見てください。 あなたたちが先取りした通りになりました。 人間が自分の死を選べない場所を最初に作ったのがあなたたちだった。 こは病院。 病院という名の収容所です。 私たちの死は私たちの手を離れて遠くにある。 もはやあなたたちが握っているわけでもない。 いや、今になるとわかる。 あの時もあなたたちが握っているわけではなかった。

将校、銃を取り出す。 M P、ベッドから起き上がる。

M P やめてください。 それではあまりにイメージ通りだ。

将校、銃口をこめかみに当て撃つ。 人造人間が再び現れる。

M P 元の） 今になるとよくわかるということが多すぎるな。 年月が経たないとわからないということがあるに多い。 ベッドの上でわかっても遅すぎるがね。

人造人間 わからないままよりましだろう。

MP 確かにアドルフ・ヒトラーという男もおれたちと同類だったのかも知れないな。

MPの周囲が暗くなっていく。

人造人間 おい師匠、そりやないだろ。もう一度そっちにいかせてくれ。自分だけはわかついて、おれはおいてけぼりかよ。おれはまだあんたの生徒のままだぜ。おい自分だけってのは狡いぞ。

女の人造人間が横切る。

人造人間 おまえ、おまえじゃないか！来てくれたのか、見舞いに、いや面会に来てくれたんだな。よくここがわかったじゃないか。おれは嬉しいよ。

女の人造人間は妊娠している様子。

人造人間 おまえ、その体は。そうかおれたちの子供か、すごいぞ、やったぞ。こうなればこっちのものだ。おれたちがいなくなってもこの子がおれたちのわからなかったことを解決してくれる。この子はおれたちとは違って父親も母親もいるんだからな！

女の人造人間が消えると、入れ替わりのように19世紀の西洋衣装を着たイギリス人が現れる。彼女のおなかもまた大きい。彼女は手話のような仕草で対話する。

人造人間 あなたは：メアリ。あなたがあの日殺した子供たちは私の子です」：そうでしたか。許します」なぜ、なぜ許すのです。それが私の一生だったから」どういう意味です。ちよっと待って。あなたもなにも答えてはくれずに、おれにおいてけぼりをくわそうってのか。なぜおれはあなたに許される、なぜなんだメアリさん！

彼女は消える。

人造人間 ああ弱っていく、彼の生命が弱っていく。おれは感じる。仲間たちの生命の遮断を。

黒人の人造人間が現れる。ライフルを持っている。

人造人間 なんだ。銃なんか抱えて一体なにをしようってんだ、同志よ。やめろ。やめとけ。とりあえずその人間たちの武器は捨てておけ。そいつに答えを求めようたって無理な話だ。そうともおれはおまえの教師になってやる。それがおれたちのルールってもんだろ。捨てろよ、そんなもん。

答えのふりは溢れかえってはいるが、そこには答えはない。警官どもの説得とは違うぞ。おれは自分のために言ってるんだ。

黒人、ライフルを捨てる。

人造人間 いいぞ。そこから始まりだ。

黒人、1、2歩行く。一斉射撃を受け、血まみれで倒れる。人造人間、叫び声を挙げて頭を抱える。

●3日後、アメリカの人造人間が癌で死去した。人造人間は弱り、陰鬱さを増していった。

●平成の時代が終焉し、人造人間にも恩赦の期待が持たれたが適わなかった。

絞首刑台。人造人間が上っていく。

頭に袋を被せられ、首に縄が掛けられる。

人造人間 私は人造人間です。

人造人間、吊られる。揺れるその姿に、世界中の言語で語られる『私は人造人間です』が流れる。

●しかしまだ話は終わらないのだった！

●1987年7月ニュー・メキシコ州ロスアラモス国立研究所。第一回人工生命国際会議ではクリス・ラングトンが『人工的に生命を合成すること』について発表を行い、成功を修めていた。

●それから数十年後の今、人造人間の遺体は医学生の実習のため××県××市科学学園都市の医学部に献体されていた。

解剖台の人造人間。ひとりの男、Aがやってくる。男Aは変装とメイクアップを始めながら、男A 生命科学研究所に人造人間は運ばれていた。私たちはこの正視に耐えない傷だらけの肉体が人造人間と名づけられていることをすでに承知していた。アメリカ国防省は人造人間と呼ばれる人工生命がこの地球上に少なく見積もっても2千人いるという情報を把握している。国防上のトップ・シークレットとしてすでにその一体の解剖がロスアラモス研究所で行われたことも私たちは知っていたのだ。私は人工生命としての人造人間の存在を信じていた。まさかこんな経路でそれに出会うことになるとは想像だになかったが。初めての解剖実習にただでさえ緊張気味であった医学生たちはまず遺体の傷の多さ、肉体一部一部の不釣り合いに驚愕した。その徹底した不整合性にひとりのオナニー好きの学生は貧血を起こして倒れた。体にメスを入れるとさらさらと毀れ落ちるのは褐色の砂だった。その砂粒こそ人造人間が溜め込んでしまった無数の叫びとささやきだった。メス

を扱った学生はその瞬間壁まで吹き飛ばされて叩きつけられた。20年ばかりの時間しか持たない彼に180年近く生き延びたと推定される皮膚細胞の切開は荷が重すぎたようだ。彼はやってきた。時間と歴史を器一杯にした彼はここに横たわっている。さあ、なにかを始めようか。解剖か、はたまた蘇生か。いいや今宵は悪魔払い、この儀式に私たちはもはやなんの躊躇も持たない。歴史という名の悪魔め、私は今こそきさまをこの世から抹殺してみせようぞ、私にはそれが可能だ。なぜならきさまを創造したのは紛れもない人間、この私、フランケンシュタイン！

男A、振り返る。マッド・サイエンティストとしての扮装。雷鳴。

●今日は何年振りかの『フランケンシュタイン・デー』！

男A、人造人間の片腕を引きちぎる。砂が毀れる。

男A 180年ものあいだ悪魔の体内のなかで発酵を続けた砂粒たちよ、これが今の外気だ。なにを思う、悪魔の細胞群よ。熱を持っているな、あがくがいい、これがきさまの最期のあがきだ！

男Bが飛び出して来て男Aの腕を咬みつく。男Bは狼男の扮装。

男A いたたた。きさま、悪魔の従僕か。なんだ、その格好は。

男B ガルルルルルッ。

男A 満月はまだ先だぞ、ウルフマン。

男B 違う、おいらフランケンシュタインだ。

男A おまえ勘違いしたな。

男B その格好のおまえに言われとうないわ。

男A 君の発想はハリウッドに侵されている。

男B そういう君はなんなのだ。

男A フランケンシュタイン。この悪魔は私自身のドゥーブル。だから私も怪物の化身。

男B ありふれた解釈。

男A あんたのは何だよ、ただの『フランケンシュタイン対狼男』やんけ。

男B 違う、これはただの表層の問題。なんとなく絵になつてればそれでよし。遺体はおいらがもらったぜ。

男A やってもいいけどどうするつもり。

男B 息を吹き返らせる。

男A あげない。

男B なんでよ。ケチ。

男 A 人類のためにこの悪魔は抹殺が妥当。

片腕をもぎ取ろうとする。男 B、止める。

男 B 人類のためを思うからこそ、この遺産は残しておかねば。

男 A 悪魔が遺産であるものか。

男 B せめて解剖を。

男 A なぜ。

男 B この男の構造を知りたい。

男 A ハハハハハハハハ。

男 B 笑いたい年頃か。

男 A フランケンシュタインであるおまえがなぜ怪物の体を知りたい。自分で作ったのだから、知り尽くしているはずだろう。

男 B やられた。

ブザー音。

男 B 一本とられた。

男 A ひっこめ。解剖もならん。なぜなら科学者の習性として知れば次に動かしたくなるからだ。この悪魔の所業は断じて歴史から放擲しなければ。

男 B その態度こそ科学者にあるまじき行為。恐れず知り尽くすことこそ我らの役目ではないのか。

男 A 君はもう負けだから何者でもないんだよ。

男 B いいえ、おいらは見た目の通りの狼男。

男 A 調子良すぎるぞ、あんた。

男 B 科学者としておいらは言う、人造人間の蘇生こそわれらが至上命令である。

男 A いかん、このことは断じて原爆の製造と同じ部類である。悪の発明であるに過ぎん。男 B その恐れに根拠はない。我々が管理すれば問題は起きないはずだ。

男 A 管理だって、まさしく核兵器の発想と同じじゃないか。

男 B 核兵器とは次元が違うさ、こいつはこれでも人間だ。教育すればなんとかなる。

男 A 教育だって、180年生きて来たこいつに一体誰が教育できるってんだ。相手のほうが間違いなくうわてだぞ。下手すればこっちが教育されちまう。

男 B いいじゃないか、我々は教育されるべきなんだよ。

賛成だわ」の声。女 Aが出てくる。

男 A おい、扮装のない者に発言権はないぞ。

女 A イェール大学から来た日系人という役柄で。

男 A きったねえな。

女 A 私たちは人造人間の記憶を利用すべきよ。

男 A 殺人犯の記憶だぞ。間違って凶悪犯の脳を埋め込めようマッド・サイエンティストそのままじゃないか。

男 B あんたの扮装の通りだよ。マッド・サイエンティストの格好のあんたが反対するのはおかしい。

男 A やっ、しくじったか。

ブザー音。

男 A ちょっと待て。おれの扮装ってのはドゥーブルとしての怪物の狂気を自ら体现しようとしているわけで。

女 A 怪物という言い方はおかしいわ。

男 B そうだそうだ、人造人間と言え。

女 A いいえ。人工生命よ。私たちはこのなかに詰まった意識と記憶を人工生命として認識すべきなのよ。

男 A そういうこと言うから我々は世間からキチガイ博士みたいなイメージで見られるんだ。

男 B あんたの扮装そのままじゃないか。

男 A だからこれはあえてこうすることによって世間のイメージに対しての批評を行っているわけだ。

ブザー音。

男 A ああ、なんでおれの逆説精神が分かってくれないの。

女 A 私たちは恐れずに彼が感じてきたことを受け入れるべきなのよ。

男 B ガルルルー。

男 B、女 A に手を差し出す。

女 A 早まらないで、狼男さん。あなたとも意見は別れると思うの。あなたは単純にこの体をそのまま蘇生させようというのでしょうか。

男 B そうということじゃないのか。

女 A 反対だわ。

男 B ガルルルー。

女 A このまま息を吹き込むんだとしたら、まさしく私たちはフランケンシュタインであるに過ぎないじゃないの。

男 A なんだって、君はフランケンシュタインじゃないのか。

女 A チェッ、しまったな。フランケンシュタインだけど、まあ私たちはそのままフランケンシュタインに留まろうってことではないじゃない。

男 A ゲームをはみ出したぞ。こいつは一本だ。

チャイム音。

男 A 大体扮装がないのがハナっから違反だぞ。

男 B そうだそうだ。

女 A 最後まで聞いてよ。彼の記憶を呼び起こしましょう。それを私たちの人工生命に植え付けてみましょうよ。

男 A 反対、絶対反対。我々の人工生命は今のまま発展させるべきだ。

男 B 人工生命に手をつけるべきじゃないな。あくまであれはあれで、こいつはこいつだ。女 A このまま蘇生させて一体なにが新しく展開するというのは。また180年苦しませるだけじゃない。そうするうちにまた殺人を犯させるだけじゃない。

男 A 同じことだ。君は我々の人工生命をも殺人犯に仕立て上げようとしている。

女 A それがそのまま人格になるとは限らないわよ。自分より早い時期に生命を持った祖先の記憶としてよ。このまま私たちの人工生命が生命を持ったとして彼はゼロのままよ。この人工生命の記憶を知らない分、逆に彼と同じ180年を繰り返すだけかも知れない。男 A 我々がついているから平気さ。

女 A 自分たちだけで教育なんかできっこないってさつきあなた言ってたじゃない。

男 A やっ、しくじったかな。

チャイム音。

男 A 女に甘いぞ、審査員。

ブザー音。

男 A しまった、イエロー・カードか。

男 B あなたの意見はよくわかりました。しかしですよ、お嬢さん、あなたの目論みはなにもわざわざそう面倒なことをしなくても達成できますよ。単純な蘇生をやって彼を再教育させるんです。

そうすれば私たちは記憶がゼロの人工生命と2種類のサンプルを持つことができる。

女 A そうかしら。

男 A とにかく扮装してこいよ。

女 A でも新しい人工生命が正確に作動するまでもう180年かかるとしたら。

男 B 蘇生した彼が教育すればいい。

女 A でも彼は：

男 A 扮装だよ、ルールなんだから。

男 B なんですか。

女 A こういいう言いは良くないかも知れないけれど、彼という器のなかの彼は自分を出来損ないの人間だと思っているわ。

男 B だからいいんだよ。なぜ私たちがこんなにも彼に構おうとするのか、それこそ彼の自分を余計者だと思いう意識にほかならないじゃないか。出来損ないだから素敵なんだよ。

チャイム音。

女 A でも彼の記憶を一度彼という器から解放してみることも：

男 B もうひとりの出来損ないが生まれるだけさ。

女 A 新しい器は記憶を分析の対象として持つことはできないのかしら。

男 B それは賭けだな。危険な賭けだ。

女 A わからなくなってきた。

男 A 扮装しねえからだよ。

女 A うるさいわね、扮装扮装って。そんなに言うんならしてくればいいんですよ。

女 A、去る。

男 A 形勢不利で逃げやがったよ。さあて続けようか。

男 B なにを続けるの。

男 A 悪魔の化身の抹殺を。すき焼きにしてくっちゃまおう。

男 B ガルルルー。

男 A しゃぶしゃぶのほうがいいか。

男 B この体はおいらのもんさ！

男 B、人造人間の体をくわえて逃げる。

男 A こらっ、人の晩飯！

男 B、ふらふらしながら戻ってくる。

男 A やややややっ。

はだかの大將山下清の扮装の男 C が注射器を片手に出てくる。

男 A なにやつ。

男 C ぼぼぼぼくは獣医のフランケンシュタインなんだな。けけけ獣のああ扱いにはななな慣れてんだな。

男 A よくきてくれました。献立は任せます。

男 C ちちち違うんだな。ぼぼぼぼくは人工生命に記憶をやるのにさささ賛成なんだな。

男 A あいつとできちまったのか、きさま。

男 C かか彼の記憶はぼぼぼくたちの財産だな。人工生命をただの人間もどきに、すすするべきじゃあないな。

男 A 出来損ないがえらそうな口たたくな。

男 C ででで出来損ないだからいいんだな、これが。人工生命はエリートになるべきじゃあないんだな。出来損ないの記憶をもも持つべきなんだな、これが。

男 A 出来損ないこそ人間もどきじゃねえか。

男 C そそそそうは思わないんだな、これが。ふふふ不完全な人間ってのは人間なんだな。

男 A 認識をハナから曲解しております。フランケンシュタインは完全な人間を作ろうとしたのであります。

男 C かかか完全な人間ってのは不完全な人間だと思うんだな。

男 A 科学にまどろっこしい倫理はいらんわい！

男 A、人造人間を取り上げ、首をもぎ取ろうとする。背後から吸血鬼の扮装をした女 A。女 A、男 A の首に咬みつく。

男 A いたたたたたっ。

女 A 吸血鬼のフランケンシュタインです。

男 A そんなもんいてたまるか。

女 A こちらも実力行使にです。体をこちらに返しなさい。

男 C なんてこった。みみみみんな、映画に犯されているなあ。

男 A その通りだ。こいつも映画で教わったぜ、こんなこともあろうと思って、どうだ！

十字架を差し出す。

女 A あんた何宗。

男 A 浄土真宗。

女 A ふざけやがって、このクソオヤジ！

男 A ギョーザもくってるぞ。

3人、揉み合う。人造人間の体を引っ張り合う。体はばらばらになる。

女 A あっ！

男 C ばらばらだ：

女 A ばらばらだ。

男 A ばらばらだ。

男 C ばらばらだ。

女 A ばらばらね。

男 A ばらばらだ。

男 A、男 C、つぶやきながら去る。

女 A ばらばらの体。ばらばらの意識。ばらばらの記憶。私の怪物。

女 A、断片を抱き締める。意識を失って倒れる。

遠くからお囃子のような音が聞こえてくる。女 A、覚醒する。

文政8年の見世物小屋。両性具有者、火吹き少女、ろくろ首、卵好きのデブ女、芋虫男、髭女、3人のピンヘッド。やがて座頭が出てきて、

座頭 レディース・アンド・ジェントルメン！毎夜皆様の疲れた細胞に活力をもたらし、だらけきった脳髓に鉄槌を見舞いまする河原ショー、今宵お目見えいたしますのは南蛮渡来の血吸い女。親の因果が子に報う、数奇な運命を辿って今ここにやってまいりましたのは、人間の血を吸いながら生命を保っている、なんと血液しか口に出来ない呪いの女。口を開いたときの両の牙にご注目ください。お天道様が西の空におりますとこの牙を光らせつつ餌食を探して江戸の夜を徘徊し、牙で首筋をがぶり、ちゅうちゅうとくろてんをすするが如く血を吸うのであります。卑しく、凶暴なる畜生、どうか目は合わさないように、一度目を合わせますれば、今宵の皆様の命の保証は当方責任を持ちかねます。さあ、いよいよでてまいります、起源をさかのぼれば南蛮はバテレンが生んだとされる角のない鬼、血吸い女！

女 A、呆然としている。

座頭 血吸い女！

客席は変化のないのにざわつき始める。

座頭 どうした、さっさとおっぱじめろ。

女 A 私のこと。

座頭 ほかに誰がいるってんだよ。今宵一座の河原ショー、新たな恐怖、血吸い女！

女 A、当惑しつつマントを広げる。客席は恐怖にざわめく。女 A、興が乗ってきたようで威嚇するように口を開き、牙を見せる。客席が騒ぐ。女 A、調子に乗る。執拗に客席を威嚇し続ける。客席のブーイング。構わずに続ける。女 A に生卵が命中する。それを合図に様々なものが投げつけられている様子。女 A、うづくまる。

静寂。蟬の声。水の音。女 A、顔を上げる。三つ目のおみねが行水を浴びている。女 A、近づく。いっしか吸血鬼の扮装を解いている。せむし男が女 A を引っ張る。そこには男がいて大きな水槽のなかに人造人間（初期の怪物）が浮いて横たえられている。人造人間の体に隈無く装填された電線。水中で電線によって宙吊りにされているような格好。

男 やっと目の前に来てくれましたね。待っていました。

女 A あなたは…あなたなのね。

男 いい問いかけだな。あなたはあなたはなのね、か。

女 A やっと、本当に、会えたんだわ。

男 それにしてはずっとつれない素振りでしたね。知っていたんですよ。私のことを時折観察していたでしょう。気配でわかっていたんです。背後から私と同じ視線で対象を見ているもうひとつの影。それがあなただった。だから私は絶対の孤独を標榜しながらひとりではなかった。しかしあなたという存在は私をよりいっそう孤独にさせた。目の前にいるというのによく見えないな。闇のなかで薄ぼんやりとしている。目をやられたのかな。違うな。ずっと夜だった。太陽というやつを知らない。なぜ私は生み出されたのです。

女 A なぜあなたは彼を造ろうとしたの。

男 あなたに「なぜ」を問いかけられるとは思わなかったな。「なぜ」を返します。

女 A 聞きたかったのよ、なぜ造ったの。

男 「なぜ」の応酬か、困ったな。私を造ったのはあなたでしょう。

女 A えっ。

男 私は私がなぜ生まれたのか、そのことを知りたくてこいつを造った。もうすぐこれは生命というやつを持ち始めます。ずっと失敗していたんですがね。私がこれまで周到に避けていた欲望というやつを臓腑いっぱいに溜め込みだすと、ずっと無視していたこいつは生命の準備を始めやがった。知ろうとしたつもりがもっとわからなくなってきた。あなたはわかっているんでしょう。知ってるんだ、あなたは遠くから来た人だ。

女 A 私が知っているのは180年間のこと。いいえ正確に言えばこれからその180年間を生きる彼にしかわからないことかも。

男 ははあ、180年間か。長い夜の果ての旅だな。短いかな。生命の誕生の果てしなさと比べれば。

女 A あなたは誰なの。

男 ふざけてるのか、それとも本当に忘れた。本当で言っているのならまた返したい。あなたは誰なのですか。

女 A 私は自分の手で生命を造ろうとしているただの…

男 なんです。

女 A ただの女…

男 やはりそうなんじゃないか。

男、着物を脱ぐ。 人造人間と同様の縫い合わせのある体。

男 あなたが造ったんでしょう、私を。

女 A あなた…

男 夜の果ての旅をいうなら私も旅人です。旅をさせたのはあなただ。

女 A 違うわ。

男 それなら私の背後の巨大な影は一体誰だというんです。

女 A でもそうなのかも知れない。知ろうと思って造って、またわからなくなって造って。私はずっとあなたの影だったのかも知れない。

男 最後の問いです。まるで目新しくもないので申し訳無いが、あなたは、誰なの、です。女 A あなたと同じよ、誰が私を造ったのかわからない。いいえ、私の影はあなたなのかも知れない。

男 遠くから来たんですね。

女 A ええ。遠くて近いところから。

男 どんなどころです。

女 A いろいろなことがあったわ。戦争。天災。栄光。退廃。暗殺。和解。建設。破壊。今感じるのはそのひとつひとつが生命だということ。私たちの生命が続く限り、その生命も同じように繰り返されるのかしら。永遠の私生児…生命。あなたもすぐにわかるわ。180年経てば。たったの180年よ。

男 私は無理です。

女 A なぜ。

男 感じるんです。私の生命はもうすぐ終わる。この男は私に殺意を抱くに違いはない。それでいいんです。私はそれを引き受けなければならない。そうすることがこの生命を維持し続けることです。

女 A 運命論者ね。

男 ただの役割ですよ。不自由な世界。できればあなたが来たところはそんなものがなくなっている世界だと信じたい。

女 A わからないわ。

男 違うんだな。

女 A こんなことを想像したの。今から180年、それからもっと経ったとき、私に会いに来る人がいるかも知れない。ちょうど今の私のように。180年後からやって来る人が。そのときも私とあなたのように「なぜ」のラリーをやり始めるのかしら。

男 楽しそうだな。生命というのはただ繰り返されるだけなのか。

女 A 違うと思う。

男 ：

女 A 違うと思う。

男 時間です。違うかどうか、やってみますよ。

男、なにかスイッチを入れる。人造人間が水槽から出される。電流が流される。人造人間に生命が宿り、動き、歩きだす。

奥にカプセルのようなものがあり、その周囲では科学者たち、男A、B、Cなどが作業着の姿で見守っている。カプセルの扉が開き、人造人間、なかに入っていく。扉は一度閉まり、再び開く。白い人が出てくる。大きな目、小さな鼻、口、男性性器。微かな胸の膨らみ。ぷよぷよとした体の、どうやら両性具有者のようだ。

女 A あなたは、だあれ。

人工生命、両の手の身振りでなにかを語り始める。

●この年、人工生命が誕生した。

●180年の記憶を持った人工生命はそのことについて語った。その言葉は後の人工生命たちによって編纂され、『フランケンシュタイン・バイブル』と名付けられた。

●フランケンシュタインのお話しはまだまだ終わらない！

たくさん的人工生命たちが出て来て各々しゃべりまくっている。

黒、白、黄色、褐色とそれぞれの皮膚の色を持つ人工生命たち。